

其角堂永機の俳諧活動——明治期編——

越 後 敬 子

はじめに

明治初期、政府の国民教化政策によって、いわゆる旧派の代表的俳諧師三森幹雄は、教導職を拜命し俳諧明倫講社を設立して俳諧による国民教化を掲げた。^{注1} 俳諧という文芸が国によってお墨付きを与えられたことになり、これに迎合する俳諧師が多かった。ところが、同時代における旧派俳諧のもう一方の雄、其角堂永機は、教導職とは無関係であった。

永機は文政六年（一八二三）、のちに晋派六世と称される老鼠肝を父として江戸下谷に生まれた。老鼠肝ははじめ江戸城のお茶坊主であったが、のちに江戸座の点者として

門戸を張った。永機もまた嘉永元年（一八四八）までには父の元で江戸座の点者となっていたことが確認できる。永機が現在知られる堂号其角堂を呼称して晋派遣道統であることを示したのは、文久三年（一八六三）に不忍池畔の其角堂にて俳諧千句興行を行い、その模様を『しのばず千句』と題して刊行してからである。永機の門には旧大名をはじめ、幕末の大通細木香以や歌舞伎俳優など、社会の上層部に身を置くものが多く集まっていた。

筆者は先に幕末維新时期における永機の俳諧活動について調査し、右のことを報告した。^{注2} 本稿ではそれに続いて、明治期の永機について現在に残された資料から考察し、永機の俳諧活動を編年で追っていくこととする。

一 俳諧の茶の湯

文久三年の俳諧千句興行以降、永機は其角堂を称し自らを晋派道統の継承者と位置付けたが、それがすぐに俳壇に受け入れられたのではなく、勝峯晋風氏『明治俳諧史話』^{注3}によれば「其角堂の正系たる承認を得たのは一具庵尋香の尽力で明治以後の事」だという。実際に文久三年以後、永機は目立った俳諧活動を行っていない。尋香がどのような尽力をしたのかこれまでの調査では明らかにできていないが、永機の働きかけと周囲の助力によって、晋派の継承者其角堂永機として俳壇に認知されるに至ったのであろう。

明治三年（一八七〇）七月、永機は其角堂を不忍池畔から向島三囲神社境内に移した。この年刊行された萩原乙彦編『對梅宇日涉 第六編』^{注4}に「七月 永機向島三囲社内に結庵」との転庵記事が載る。向島三囲社とは、かつて其角が「夕立や田を見めぐりの神ならば」の句を神前に奉納して雨乞いをしたという晋派ゆかりの地である。永機は改めて活動の本拠をここに据え、其角道統の継承者として俳諧活動を展開するのである。その後しばらくは、同九年に門人の善哉庵予雲とともに『美農李種集』を上梓したほか、毎年いくつかの俳書へ発句や歌仙の入集が見られる程度で

ある。

十一年夏、永機は向島の其角堂において俳諧の茶の湯を行った、という。この時の模様は『欠摺鉢』と題して刊行されている。本書は半紙本一冊、「明治十一戊寅晩秋」奥書、永機版下、其角堂蔵版。冒頭で永機は次のように述べている。

或師の云、利休の茶の湯にあひて事を好むともがら、その折ふしの道具どもを是は古シ是は新シなど、目をはりてほめあひければ、利休散々不興にて、新古の目利は商人にこそあれ。道を好むともがらはたとへ欠摺鉢なりとも時によろしく茶の湯に用ゆると用ひられざるとのさかひを弁まへて、物数寄をほむべき也とありしとかや。俳諧もさのごとし。句は道具也。褒^{ウヤ}乏^{ウヤ}はあき人なり。其席にのぞみ自暴自棄の権におち、句ごとにあらぬ工ミをめぐらし、一卷の首尾を失ふは本意成まじくや。打越の六かき所か席のしぶりたる時、時に宜しく付流したらば、たとへ無為の句也とも是用也。世間の心をかねて、一句おのれが作に倒れ、人の前句を付ころしなどせんは無下に口惜きはたらき也。用無用の境、新古の分別心ざしを高く守らば、自然の風流あらはれて、幽玄の一句もいかで思ひはづしぬべきやと鼻祖の雑談に残せり。こゝに用無用の境を越た

る人々をまねき、欠摺鉢を幸のものかなとひと日俳諧の茶の湯もよふしける。

茶の湯の道具の新古にばかり夢中になるのは商人のなせるわざであり、本当に茶の湯を好む者はたとえ欠摺鉢であつても時には用いるものだ。それは俳諧でも同様である。句は茶の湯における道具である。それを批評するのは商人と同じである。工みをめぐらすでもなく時に難しい付合をさらりと付け流すことができたなら、作為のない句であつても働きをなすのだ、と茶の湯における道具と俳諧とを比較して論じた文章であるが、引用一行目から十五行目の「幽玄の一句もいかで思ひはづしぬべきや」までは、大半が其角の『雑談集』（元禄五年刊）に載る文章で、その中のいくつかの語句を言い換えたものである。

この日の茶会は永機を亭主として、客は為山・壺公・春湖・菊雄・等栽ら五名であつた。まず寄付に入ると、其角筆「晋」一字の額、晋子伝来の文台と硯箱が置かれ、床には弘福鉄牛筆「生死事大」の軸が掛けられていた。ここで其角句「いそのかみしみづ也けり手前橋」を立句として六句めまでが付けられた。

脇起俳諧

元角田川牛田といふ所にて

いそのかみしみづ也けり手前橋

晋子

真菰に交る一株の苗 永機

よき人のはなしの答静にて 為山

筆とるさまの滞なき 壺公

初月のながめにはづす軒すだれ 春湖

渡るにしては早きあぢむら きく雄

続いて茶室に入つて初座を済ませた後、再び寄付に戻つて中立の席で七句、改めて茶室に入り後入でお茶をいただいた後に十一句を次いだ。このようにして二十四句めまで連句を巻いたが、その後一行は船で隅田川に夕涼みに出かけたため満尾せずに終わったようである。その他、同じ席で席上探題も行われた。茶会の記事はここまでであるが、本書にはこのほか、其角の『句兄弟』（元禄七年序）の六格―健句・新句・清句・偉句・麗句・豪句―に做つた諸家の発句、詢堯斎・永機両吟歌仙、永機・孝節両吟歌仙、静和・永機両吟歌仙、正義・永機・機月三吟歌仙、永機・予雲両吟歌仙等を収める。いずれも永機とその門人たちの歌仙である。

以上のように本書は永機主催の俳諧の茶の湯の記録であるが、『雑談集』に載る其角の俳文に做つた巻頭の文章としい、『句兄弟』に做つた形式としい、其角を意識した作りになっている。しかも永機は其角の筆意を会得しており、本書版下も其角筆かと見まがうようなものである。なお俳

諧の茶の湯は其角堂において折々に行われていたようで、明治十三年刊行の雪中庵梅年編『統一夏百歩』にも其角堂での俳諧の茶の湯の話題が記されている。

ところでこの其角堂での俳諧の茶の湯は、本当に明治十一年夏に行われたのであろうか。この記事を最初に紹介したのは前掲の勝峯氏である。

その著『欠摺鉢』は……本格的な茶会記録である。明治十一年の夏、向島三圃の其角堂の茶席に於てある。正客及び相伴は月の本為山、小筑^(マユ)庵春湖、閑樹園菊雄、壺公とあるのは京都の芭蕉堂壺公は前年故人となつたから同名異人であらう。……初裏に移つて二句目から佳峰園等裁が出詠してゐる。

このように茶会が明治十一年の夏に行われたことを明記し、壺公については芭蕉堂壺公ではなく別に壺公がいたことを推定している。

芭蕉堂壺公とは、次のような人物である。^{注5}

壺公 永安氏、長門国萩の人で芭蕉堂公成門。幕末の頃江戸に出て浜町に住んだ。最も著名なのは明治五年の改暦後、太陽曆に準拠した句集『ねぶりのひま』を早くも明治七年に刊行したことである。この年の暮れには郷里萩に帰り、九年五月、京都の芭蕉堂八世を継承した。明治十年五月二十三日没、六十六歳。

勝峯氏の述べるように、たしかに前年の五月に没している。つまりこの茶会が明治十一年夏に行われたのであれば壺公が一座することはできない。そこで別人の壺公に当たつてみたのであるが、この当時芭蕉堂壺公以外の壺公がいた形跡を見つけることができない。

その他の客についても簡単に触れておく。

為山 関氏、梅室門。幕府の御用左官から点者となつた。明治七年、教部省から推されて俳諧教導職になり、俳諧教林盟社を創設し初代社長となつた。明治十一年一月十九日没、七十五歳。

春湖 橘田氏、嵐外のち禾木門。明治七年、為山とともに俳諧教導職に補せられる。為山の没後俳諧教林盟社の二代目社長となる。明治十九年二月十一日没、七十歳。

菊雄 青山氏、為山門。明治十七年二月十日没、六十八歳。

等裁 鳥越氏、淡叟のち梅室門。為山・春湖とともに教林盟社創設に関わるが、のち花本講社を起こした。明治二十三年十二月六日没、八十六歳。

実はもう一人、為山も明治十一年一月に没しており、夏に行われたこの茶会に参加することは不可能なのである。そこでもう一度この顔ぶれを見直すと、為山・春湖・等裁

は「江戸の三大家」と称され幕末の江戸俳壇を代表する俳人であり、菊雄も為山門の俳人として多くの俳書に名を見出すことができる。それらの俳人と同座する壺公は、どの誰だかわからない壺公ではなく、芭蕉堂八世の壺公以外にいないのではないだろうか。つまりこの茶会は壺公の没する明治十年五月以前に行われたものだと考えざるを得ない。壺公は幕末から明治初年にかけて江戸に滞在し、明治七年に郷里に帰る際には永機らと送別の連句を巻いてもいる。そこでさらに想像をたくましくすれば、これらの俳人が東京の其角堂で一堂に会することのできた明治七年までに行われたと考えるべきではないだろうか。明治七年の茶会記録に四年後の十一年の奥付を付して刊行することはそう意外なことではないだろう。

二 父の遺稿出版

明治十四年、永機は『俳諧み、な草』を上梓した。本書は中本二冊、小築庵春湖校合、永機序、八千房流美跋、東京松崎半造刊。流美跋に「晋派七世の主永機叟は、ことし其先考螺窓居士（筆者注…老鼠肝）の清浄忌をいとなみ為追福、居士が遺稿のそが中なる晋子年表及び句解を上木してみ、な草の名あり」と記すように、この年は老鼠肝三十

三回忌にあたっていた。本書には、乾巻に東京向島三囲其角堂之図（狩野晏川画）、晋子六世螺窓居士肖像（永機模写）、晋子年考を、また坤巻に晋子句解、老鼠肝の句を立句とする脇起百韻、神祇・釈教・恋・無常等に分類した其角・老鼠肝・諸家の発句、そして四時混淆諸家発句を収める。乾巻の東京向島三囲其角堂之図以外はすべて永機版下である。

乾巻の「晋子年考」は其角の生誕から死没までを編年体で記したものである。年考の内容について勝峯氏は前掲書において精査され、「淡々の『十七回』と題せる其角の追善集に掲ぐる其角年立を骨子として、其角に関する俳書を渉獵して年代的に編述したのであるが、豊山の『晋子一伝録』の記事は疑問として採らない点にもその見識が窺はれる」と述べている。勝峯氏のいう淡々編『十七回』には其角の「自筆年譜」が載り、この年譜は現在に至るまで其角の伝記資料として利用されている。本書はこれを骨子としてその他の俳書からも其角伝を集めたものであるという。

ところで田中善信氏は、この淡々編『十七回』の「自筆年譜」について、「其角自身が書いた年譜であれば彼の伝記研究の第一級資料だが、しかし全体としてあまりにも雑駁な内容であり、其角が書いたとは考えられない。（中略）『其角十七回』には作り事が多い。この「自筆年譜」も編

者淡々が手元の資料を利用して捏造したものだとは私は考えている^{注6}」と其角自著の信憑性について疑問を呈されている。筆者は其角の伝記、また『十七回』「自筆年譜」の正偽に關して判断できるすべを持たないのでそのことは置くが、いずれにしても本書『俳諧み、な草』「晋子年考」は研究的な態度で記されたものであり、現在の其角伝記研究^{注7}と比較しても大体的ところの射た内容のようである。坤巻の「晋子句解」は、其角の発句五十句に老鼠肝が句解を施した形になっているが、中には永機や校訂者春湖による注も見られる。

勝峯氏はまた「永機の父鼠肝はお茶坊主から深川座の点者となつたので、其角の年譜を編むやうな考証的学風の人物と思へない。父の遺稿とは或は思ひ違へた謙遜であるやも知れぬ。永機自らの著述をかの『以テ顯スハ父母^三孝之終也』の本文を誤解して亡父の名に仮託したのであるまいか」とも推察している。筆者もこの点に關して、あるいはそうであったかもしれないと考える。先に拙稿で述べたが、老鼠肝は七世湖十の門人であつたから自らが其角に繋がる系譜にいたことは自覚していたであろう。しかし生前学問的な書を遺すこともなく、江戸座の一点者として生涯を終えた。一方の永機は江戸座の点者生活に飽きたらず、自らを晋派道統七世に、父老鼠肝を六世に位置付けた。父への

孝もさることながら、連綿と受け継がれた晋派の系譜を印象づけるために、晋派六世老鼠肝の遺稿と銘打つたのではないだろうか。

三 千句興行と夏書

明治十六年五月末から六月ははじめにかけて、永機、雪中庵八世梅年、藤島太年、永機門の予雲、同じく静五の五名を中心として、東京亀戸天神において俳諧千句興行が行われた。この時の模様は同年十二月に刊行された『かめと千句』に収録されている。本書は中本一冊、前田夏繁序、永機序、梅年跋。永機序にいう。

千句興行の事は文久三年の春 香城老人の若水や硯洗は、こ、の池 いつをむかしの花の十返りと脇せしより、不忍千句なれり。いつを昔といへる嘆息を未來記として序す。卓郎香城貫乎五袖及関雪江迄も黄の泉に帰りぬ。身はいつの煙のために残るらんとある心敬僧都の句もおもひ出られてそゞろにかなし。十返りの花の花なくも予と太年のふたりはたよ／＼として今に散も果さず、二十年前旧詩卷十人酬和九人無とふた、び興行せん事をかたる。梅年は位よし、千句のちなみもあれば二言といはず、その座に予雲静五在合せていざ

やとす、む。やがて五月廿五日のあした 聖像の御前にすが／＼しく香を炷花をたて先三巻をはじめ。廿八日は先考螺窓翁の忌日なれば四百韻をつぐ。次の月の一日三百韻さら／＼といひつらねたり。明治十六年六月三日といふ日、亀戸社頭に養してうや／＼しく神酒神饌をそなへ、社人をして祝詞を奏し、恙なく吟じ畢。執筆は三素庵成雅金令舎松雄のふたり也。かたはらに聞もの八十余人。此日の詠草は瑞籬のもとに埋て一塊の記念を残し侍りぬ。

冒頭に記される文久三年の千句興行とは拙稿ですすでに述べたように、不忍池畔の其角堂で興行された俳諧千句のことで、その内容は『しのばず千句』に記されている。これは龍尾園香城編、孤山堂卓郎校閱、雪江関思敬版下、連衆は永機・香城・貫乎・五柚・太年であった。それから二十年を経たこの年、七名のうち卓郎・香城・貫乎・五柚・雪江の五名までもが鬼籍に入り、残されたのは永機と太年のみであった。その二人に梅年・予雲・静五を合わせた五名で再び千句を行ったのである。

五月二十五日、場所は亀戸天神社殿であろうか、道真像御前に香を焚き花を生け、千句興行の初日が幕を開けた。

最初の百韻は永機の発句で始まった。

賦何河俳諧

松梅の奥の一木や初ざくら 永機

朧ながらに高き朝月 静五

めでた事白酒唄にうたはせて 太年

ものさしいらす手拭をさく 予雲

間仕切にしばらく借る二枚折 梅年

雲幾運びみぞれこぼる、 機

ふは／＼と冬のすがたのむら鴉 五

磨き丸太を建並べけり 太

この日はほかに二巻、計三巻三百韻を巻いて終えた。二日目は五月二十八日に四百韻、三日目は六月一日に三百韻を巻き、これで百韻十巻すべてを巻き収めた。いずれの百韻にも先の五名のほかに数名の途中加入者があった。

そして六月三日、亀戸天神社頭においてこれら千句の披講が行われた。神前に神酒と神饌を供え神職の祝詞に始まった。執筆は三素庵成雅と金令舎松雄の二人、参会者は八十名以上であった。この時の様子は前田夏繁の序に描写されている。

宗匠達は道服の袂ゆたかに坐せるも有り、烏帽子のかけ緒長く結びさげて面たゞしく出たてるも有りていと珍らしきさまなれば、かくと聞伝へたるすき人の多くつどへるもことわり也。

本書には狩野晏川画「亀戸社頭千句披口之図」も付されて

いるが、道服を着用した法体の人物、烏帽子を被った人物、文台を前に懐紙を手にする執筆などが描かれている。このような座で千句が次々と読み上げられ、席上左の発句も披露された。

披口席上

守武も貞徳もきけ時鳥

永機

通らずも引おふせけり大矢数

静五

毫の手に斗り得し実梅哉

太年

一つらね下手の植たも青田哉

予雲

幣のあまりの風やみな涼し

梅年

そして詠草は瑞籬のもとに埋められ、その跡を記念して「千句塚」を建立したのであった。

ところでこの年、明治十六年は永機の母里見の五十年忌であった。そのため永機は五月十四日から八月二十一日にかけて百箇日の夏書を行い母の菩提を弔った。つまりこの俳諧千句興行は、夏書の最中の出来事だったのである。この百日間の記録は句日記に記され、同年十二月に『新花摘』と題して刊行された。本書は中本二冊、小野桃齋校、永機序、多田孝泉跋^{注8}。下巻の多田孝泉跋以外はすべて永機が版下の筆を執っている。自序にいう。

天保五年六月廿三日のゆふべ、母に別れし悲しみ、年々歳々いやましてわすれがたくあれば、晋子が孝に

及ばずとも花摘に倣てなんとおもひ起しぬれど、春秋の羈旅にたゞよひ、夏冬の仙境に遊び、花に徘徊雪に徊り、艸のねづみの草葉の齡も枯く成行て終に五十年の星霜夢の如く幻の如し。こゝに今年同光の忌のたよりあればその日その夜見聞文音の句をつみて、一夏百句の縁に結び、随時経と号て海内の導師に贈る。親疎をわかす事なきは彼日記なれば也。

「晋子が孝に及ばずとも花摘に倣てなんとおもひ起しぬれど」とあるのは、其角が母妙務尼の四回忌にあたり追善のための一夏百句を行い、その間の句日記を記した『花摘』のことである。其角の『花摘』は元禄三年（一六九〇）四月八日の「上行寺 灌仏や墓にむかへる独言」から始まり、七月十九日の「満百 有明の月に成けり母の影」まで、それに閑興六歌仙などを付載している。一方永機の『新花摘』は、五月十四日（陰曆四月八日）の「長建寺 灌仏や十二の時の遊びわざ」に始まり、八月二十一日（陰曆七月十九日）、百箇日満願の日の「満百 みのむしやけふの鳴音は母恋し」まで、それに門人との閑興六歌仙などを収めている。つまり永機の百箇日の夏書および本書の内容や体裁は、すべて其角の『花摘』に倣ったものである。

五月二十五日から六月三日までの亀戸天神での千句興行の日のことを、『新花摘』中では次のように記録している。

五月二十五日

遊紅葉館^二。一室に利休の像を安置せり。ふるく大徳寺に有しを前の川上^一不白伝来せりと也。嗚呼此一体に生涯を破りし事の哀に覚え侍りて

手向

松よりも住よかるべし若楓

機

こゝも又我住うくてうかれなば松はひとりにな

らんとすらん 山家集

五月二十八日

如來眉間有^二白毫^一猶^三阿雪^一

夏の富士仏が見たらほとけ哉

機

六月一日

八百善 茶事 正午

席六窓庵

松平市正

狩野晏川

客 晋 永機

寺嶋梅幸

小川松民

床 袖たにぎく

遠郭公 さだかにも誰が聞らん時馬
それとしもなき遠かたの声 義政

土風炉

大崎御物

釜 切子あしや

炭とり

唐もの組籠

灰器

古備前

香合

堆朱扇形

羽帚

山鳥

後入

床

花入 經筒 江雪和尚箱書

花

太山蓮

茶入

仁清 箱一尾伊織

茶碗

繪御本 砂手
銘篠葉不味書

茶杓

桑山可舟とも筒
綱宗嘉心翁の文珍

御茶

初昔 上林院

こぼし

高取 箱不味

開の間もをかしけれど、さまざまはともらしぬ

郭公義政どのをはつ音哉

機

六月三日

於亀戸社頭千句披口

守武も貞徳もきけほと、ぎす

機

千句興行初日の五月二十五日には、東京芝の紅葉館に出かけ千利休の像を拝んだことが記されている。紅葉館とは明治十四年に芝公園地内楓山に設立された純日本風の料亭のことで、溪流あり、築山ありという広大な敷地を有していた。設立時の館則に「一、当館ハ貴顕紳士ノ集會共遊ヲ旨トシ、雜客群聚ヲ避ルカ為メニ、大凡會員三百名ト定メ、其証券ヲ渡シ置クヘシ」、「一、此証券ハ一葉毎ニ金拾円ト定メ、開館当日ヨリ第一ヶ年ノ通用トス」とあり、会員数は三百名限定、一人十円の出資が必要な上流階級のための高級サロンであった。^{注9} 政財界人の集會や外国人の接待に使用され、後には尾崎紅葉や巖谷小波ら文壇の人々も出入り

した。紅葉館の敷地内には三疊敷の利休堂があり、千利休の像が安置されていた。この日の記事にあるように元は京都大徳寺にあったもので、利休自らが刻んだものであるという。永機はこの像を拝んだのであろう。

ところで話は少し逸れるが、永機はどのような伝手でこの高級料亭に入りにできたのであろうか。永機自身が三百名の貴顕紳士の群に入るとは考え難いが、証券を所持する者は家族・親戚・朋友を伴うことが可能であった。そこで永機の交友関係を探ってみたところ、本書『新花摘』の校訂者、小野桃斎が会員だったのではないかと考えられる。

次章で述べるように、桃斎は後に永機の送別会を紅葉館で催してもいるからである。桃斎は永機門の俳人であるが、本名小野義真、天保十年（一八三九）に土佐国宿毛の大庄屋に生まれた。はじめ明治政府の官吏になったが、のち実業界に転身し、三菱会社の顧問となって岩崎弥太郎を助け、また日本鉄道会社や小岩井農場の設立に関わっている。なお、さらに余談であるが、明治四十四年調べの紅葉館の「書画軸明細書」には、永機の「滝ニ紅葉」の軸が記載されている。請われて寄贈したものであろうか。

興行二日目の五月二十八日は、「夏の富士」の句をあげるだけでこの日の行動を示す記載はない。次に三日目の六月一日は正午より八百善の茶事に招かれている。「席六窓

庵」とあるのは、現在東京国立博物館の庭園に建つ茶室六窓庵^{注10}のことであろうか。六窓庵はもと奈良興福寺内に創建されたが、明治十年に博物館に移築されている。この茶室を借りて八百善主催の茶事が行われたのであろう。客は松平市正、画家狩野晏川、歌舞伎俳優尾上梅幸、蒔絵師小川松民、それに永機の五名である。茶事の詳細については省略しているが、初座と後座で鑑賞した茶器について記している。最後に千句披講の行われた六月三日には、『かめと千句』でも「披口席上」として発表された永機の発句が載るが、その日の詳細については全く触れていない。

以上のように、六月三日の千句披講以外の三日間、永機は『新花摘』中でこの興行について触れることはなかった。それどころか紅葉館で利休像を拝したことや八百善主催の茶事の様子を記し、まるで千句興行など行っていないかのような印象さえ受ける。この点について勝峯氏は「……彼はその前後の行動をその著『新花摘』の日誌に誇大な筆で記録してをりさうなもので……千句の事には遂に一言も筆を及さなかった。この事は彼の淡^{たん}懐な心事を見るやうで奥床しく感じられる」と述べている。奥ゆかしさ云々は別の茶事に参加することなど可能なのであろうか。

そのことはひとまず置き、『新花摘』中のほかの記事に

ついても見ておきたい。六月六日から九日にかけて、紫香・梅年・竺仙ら当時の粹人^{注11}とともに江ノ島・鎌倉に遊んだ折の句が並んでいる。この旅の様子を簡単に記せば、六日、永機は「江の島出杖 かるき身や外に荷とても夏衣」の句を詠んで江ノ島に向けて出発、七日には金沢の六浦潟や杜戸明神を巡り、八日に江ノ島内の寢姿石や稚児が淵などに遊び、九日には鎌倉円覚寺を拝観している。また、七日の夜には酒席での即興で連句を巻いている。

ところで、この年永機は『江の島紀行』を上梓している。これは「明治十六年癸未仲夏」の奥書を持ち、全編永機の版下になる。この冒頭で「行水のとまらざるは風雅の魂とて、今としさつきの始め、鎌くら山の青葉見むと文殊庵の誰かれをうながして出たつ」（傍点筆者）と述べているように、文殊庵（紫香）・梅年・竺仙とともに江ノ島・鎌倉を旅した紀行文で、その内容は『新花摘』六月六日から九日に記されるところと重なるのである。

『江の島紀行』には「さつきの始め」とあるだけで出発の日付は記していないが、翌日の記録に七日と記されるので出発は五月六日であったか。初日は竹柴の浦から金沢の能見堂・称名寺・六浦潟を巡り瀬戸で夜泊した。七日は金沢八景の一つ野島から逗子、葉山の杜戸明神を経て鎌倉へ入り、江ノ島に宿泊した。翌八日は一日江ノ島に遊び、日

蓮上人寢姿石や稚児が淵を散策して江ノ島泊。明けて九日は鎌倉の満福寺で腰越状を拝見し、建長寺、円覚寺を拝観したのち戸塚駅に出、帰路に着いた。『新花摘』の句日記に比べ、こちらの紀行文はずいぶん詳細に描かれている。

この旅の時期を『新花摘』では六月六日から九日、『江の島紀行』では五月六日から九日とするがどちらが正しいのであろうか。『江の島紀行』には出発の際の四名の発句が載る。

時鳥九輪ばかりの夜明かな

紫香

青葉若葉雨と中よき日也けり

梅年

雨ながらうれし若葉を笠のつま

竺仙

かるき身や外に荷とても夏衣

永機

紫香句の「時鳥」は中世の連歌書、または近世の季寄書に四月、五月の鳥とされ、特に寛文四年（一六六四）の『三湖抄』には「三月末より五月までのものなり。六月に入りはせぬなり」とある。もちろんこれはほととぎすの初音を待つ気持を詠む場合のことを言ったものであろうし、実際には夏の間中鳴いているであろうが、やはり六月のほととぎすを詠むのは時期的に遅すぎる印象がある。それは梅年の「青葉若葉」にしても同様である。また『江の島紀行』初日の条には「能化坂にかゝり侍るに、さつきといひ雨といひ苔なめらかなれば」（傍点筆者）とも記している。

文中二度までも「さつき」と言い、「時鳥」「青葉若葉」等の季語を詠むことから、この旅は五月に行われたもの、つまり『江の島紀行』の日付が正しく、『新花摘』中ではそれを翌月のこととして記事に加えたのだと考えられないだろうか。

ここで先の亀戸天神での千句興行に戻るが、『かめと千句』ではこの興行を五月二十五日、二十八日、六月一日の出来事とし、さらに千句の披講を六月三日に行ったとする。『新花摘』では千句を興行した同じ日に紅葉館で利休像を拝したり、八百善主催の茶事に参加したりという記述があり、同日に両方の行事をこなすのは少々無理があるようにも感じる。『新花摘』は自らの百日間の句日記と諸家の句文とを記したものであるが、その日の体験をその日のうちに正確に記したものは限らないし、また真実だけを記す必要もないであろう。『新花摘』の内容が虚偽であるとは思わないが、実際にあつた出来事を省略し、過去にあつたこと、もしくは過去にもなかつたことを配した創作的句日記と見るべきではないだろうか。

四 芭蕉二百回忌取越法要

続いて明治二十年の永機について見ていきたい。この年

の永機は俳壇ばかりでなく広く世間一般の人々にまで注目されていた。明治二十六年に迫つた芭蕉二百回忌を六年も取り越して、近江義仲寺で大法要を執り行つたからである。法要は十一月、芭蕉忌の陰曆十月十二日に合わせて行われたが、そのための準備と宣伝は半年も前から始まつていたのである。

当時の小新聞『やまと新聞』に、この年五月以降の永機の動向が逐次報告されている。それによれば、永機は秋の芭蕉二百回忌法要に向けて出発するため、五月一日に三冊の其角堂で離盆を催している。庵中立錫の余地もないほどの盛況ぶりであつたという。また七日には芝紅葉館において小野桃齋主催の別杯の宴が行われ、百名ほどが参加した。そして二十一日、永機は三冊を後にした。それと同時に其角堂を門人機一に譲り、自身は阿心庵と号することになつた。その後は関東を北上し北越地方を遊歴しながら、法要の行われる義仲寺まで向かつた。そして十一月二十日から七日間にわたる芭蕉二百回忌取越法要が始まるのである。

この法要の様子は明治二十六年、二百回忌正当の年に『元禄明治枯尾華』と題して刊行されている。本書は半紙本二冊、永機編、其角堂機一校訂、東京晋永機刊。上巻には『元禄枯尾華』の題簽があり、元禄七年の其角編『枯尾華』を収録する。下巻は『明治枯尾華』と題し、江州粟津

義仲寺之図、序にかえて文章宛其角書簡の写し、二百回忌追善の百韻・発句・歌仙等、そして梅逸跋を収める。まずは本書下巻に記された範囲でこの七日間を見ておくことにする。

十一月二十日（陰曆十月六日）、導師に三井寺法明院住職敬徳阿闍梨を迎え、芭蕉二百回忌法要が開始された。

なき魂の御出あるは年に五たびとねはん経に見えたり けふはそのためしを捨て

枯蓮やこゝに浄土の道しるべ 永機

ほかに大阪の八千房七世流美や尾張の荒川寄陽、永機門の矢部指直ら九名の句が載る。翌二十一日には東京から駆けつけた永機門の機一・磊山・松塙、また雪中庵八世梅年らも参加している。二十二日、徳島の木守庵禾陽らが参加。二十三日には大阪のあしの九家貞英らが参加し、この日までの参加者で歌仙を巻いている。二十四日、二十五日にも新たな参加者があるが、詳細は記していない。二十六日、いよいよ陰曆十月十二日の芭蕉忌正当の日を迎えた。この日の記事には「追善之俳諧」百韻と諸家の発句を収めている。百韻の表八句は次の通りである。

枯て後尾花にかゝる雲もなし 永機

霜なつかしく笠をいたゞく 機一

くれ椽の杳目こまかに夜の明て 詢堯

ぬり鞍置けば馬もよろこぶ 苑好

みつが三つ餅のひつゝ、く山折敷 磊山

霧もかざりの菊のはつ月 静和

脱かぬる葛の袴をうち恨み 正義

かぞへて遠き秋も此ころ 機春

永機の句を発句として、幕末の津藩主詢堯・機一・苑好らすべて永機門の俳人で占めているが、このあとには各地の俳人名が散見する。この日のことを勝峯氏は次のように記している。

いよゝ／＼芭蕉忌の十月十二日（陽曆十一月廿六日）には正式の文台を立て、永機と梅年が正副宗匠、執筆は機一、苑好が交代で勤めて百韻一卷を芭蕉翁の碑前にさ、げたのであった。（中略）二の裏の花の座は大切な場所なので、こゝへ選ばれるのを挙句の花について名誉とされてゐたが、此百韻には

花提て通ればせまき潜り門 義仲寺現在 乍昔

が挙げられる。乍昔は無名庵を号した芭蕉堂の堂守であった。これに対し名残の裏の

青天にこぼるゝ花を座に請て 梅年

と梅年が匂ひの花の句主に推されてゐる。作者は百韻一人一句づゝで「僧正の鼻もつ役も肌さむく 三升」とあるのが九代目団十郎であり、菊五郎の梅幸や三河

の蓬宇、東京の金羅、大阪の八千房無腸の名なども巻中に配置されてゐる。これらの人は出席した訳でないから誰かゞ代作したものである。

やはり正式俳諧のかたちに沿って行われたようであるが、百名が一堂に会していたのではないらしい。この百韻の成立事情については梅逸の跋で触れられている。

明治枯尾華は七年以前吾師永機翁、於義仲寺に七日七夜の法会執行有し日記也。出杖の折北越行脚して細道の細きをさぐり、有磯海のそこはかとなく道くの風士をつのり百韻満尾に成ぬ。そを筆の始として普音の吟をももらさず挙て、後の語りぐさにとなり。

永機は五月に三囲其角堂を出立してから北越地方を廻り、有磯海（富山）を経て義仲寺に到着したが、その道々で出会った俳人たちに句を請いながら百韻が満尾したという。匂いの花を雪中庵梅年に、二の裏の花を義仲寺住職乍昔にあてがっていることから、「道々の風士をつのり」とあるのは言葉の綾で、永機は半年に及ぶ行脚中、芭蕉に捧げるこの百韻の出句者とそれぞれの句の配置まで練りに練っていたに違いない。そしてそこには親交のある歌舞伎俳優三升や梅幸、旧津藩主詢堯齋、京都・大阪・東京の有名俳人の名をちりばめ、華やかさを演出することも忘れなかったであろう。勝峯氏はさらに、其角堂機一から直接聞いた

として次の話を紹介している。

追善俳諧を行った式の模様は芭蕉翁のお墓に向つて右に芭蕉堂がありまして、その左に二十畳ばかり敷ける道場があつて真中は石だ、みになつてゐました。そこで七日の間には俳諧の日、発句の日、源氏講などもあつて連日四五十人は欠かしませんでした。俳諧の次第は付句ができませんと執筆に向ひ御前句と呼び掛けて文台の前に進み出ます。さうして口づから付句を読み上げると、執筆が宗匠の顔色を覗つて、よろしいと頷くを見てから治定して懐紙に認めるのでして、別に變つたこともありませんでした。大概朝の九時頃から始まり、百韻を卷了るのは燭し頃でありました。これは「文台燭を取らず」といふ掟があるので、灯がついてから決して巻かない事になつてをりましたからです。

『明治枯尾華』文面からは知ることのできない、興味深く貴重な話である。

五 晩年の集大成

明治二十一年五月、永機は一年に及ぶ旅から東京に戻つた。その後の永機の動静は引き続き『やまと新聞』紙上で

報じられている。三囲の其角堂は機一に譲っていたのでしばらくは仮寓し、十一月に芝の紅葉館傍に新しい草庵阿心庵を構えた。二十二年には、三月三十日の其角忌にあたって三囲の其角堂で法筵の俳諧を興行しているが、ほかには熱海や有馬の温泉に遊ぶ記事ばかりで、特に熱海には何度も往復している。芝公園内の阿心庵は冷えが厳しく体に堪えていたようだ。そのため翌二十三年一月には熱海に無漏庵を新築し、寒さの厳しい間だけこちらに杖を止めていた。この年も三月には其角忌を行い、九月から十月にかけて京都を旅している。二十四年五月、東京上野桜木町養寿院内に老鼠堂を創立し、これより阿心庵を改め老鼠堂を号した。この年も箱根や東北地方への旅に出かけている。二十五年、永機は古稀を迎えた。四月には火災に遭い、九月には腕を骨折するなど災難が続いた。この年は久しぶりに俳書『雑体五歌仙』を上梓している。本書は中本一冊、永機序・跋・版下。紫香・竺仙・永機による神祇・釈教・恋・無常の四歌仙と永機独吟の文字鎖歌仙一卷を収める。そのほか、例年通り其角忌を行い、各地へ旅行もしている。二十六年は芭蕉二百回忌正当にあたる。六年前に義仲寺で大々的な取越法要を行っているが、この時の法要の模様を記して『元禄明治枯尾華』を上梓したことは先に述べた。ほかに四月には上野寛永寺生池院の芭蕉二百回忌追善会、五月に

は伊賀上野の芭蕉碑建碑、十月には東京小石川関口芭蕉堂の芭蕉二百回忌追善会等、各所の追善会に列座している。

二十九年は其角の二百回忌にあたる。晋派遣統を名乗る永機にとって、その追善は重要な行事であったことだろう。永機は其角の二百回忌と父老鼠肝の五十回忌を同時に執り行うことにした。老鼠肝の五十回忌正当はこの二年後であるので、取り越して行ったことになる。この追善法要に関するものと思われる一枚刷^{注13}がある。

観蓮会 八月二日

宝井其角 二百回

深川鼠肝 五十回

書画小集

於不忍生池院不論晴雨

修行仕候間早天より御來車翼候

魚かしの社中

大補 宝井晋路

晋 梅逸

后見 晋派一列

晋 機一

晋 雪人

催主 晋 永機

八月二日に上野不忍池生池院で行われる其角二百回忌・老

鼠肝五十回忌記念観蓮会の案内である。催主は永機、大

補・後見にも晋派の面々の名が連なる。一枚刷には「早天より」とあるので実際に蓮見も行われたであろうが、同じ日同じ場所で其角・老鼠肝の追善法要も行われている。そしてこの時の法会の様子は、『七多羅樹』に記載されている。本書は大本一冊、明治二十九年八月二日関東空也門徒跋、永機版下、明治三十年七月十五日東京晋永機刊。巻頭に大阪の八千房八世無腸の題字を置き、続いて其角堂・雪中庵・老鼠堂・八千房・八百善・条野氏ら、諸家の所蔵する其角墨跡の模写十八点が色刷りで掲載される美しい俳書である。続いて八月二日の法要が記録されている。まず養寿院権僧正栄海を導師として寛永寺の僧侶が法華三昧を修し、ほかに空也念仏、献茶式が行われた。その後永機らは「晋噪岡翁追福之俳諧」を興行した。永機の「蓮の香や濁りにそまぬ水の筋」を立句にして表八句には永機門が並び、連衆にはほかに雪中庵八世梅年や九世雀志も加わり、歌舞伎俳優の三升・梅幸も名を連ねている。また発句も手向けられたが、京都の黄雲亭稻処や大阪の八千房無腸とその門人、阿波の禾陽からも寄せられている。芭蕉二百回忌の時ほど大々的に行われたわけではないが、永機門の俳人や晋派に連なる俳人、その他東京・京都・大阪等の著名俳人からも句を得て、其角二百回忌の追善法要を無事に終えた

のであった。

三十一年三月、『都新聞』で行われた俳人の人気投票「俳諧十傑投票」で、永機は三四四六一票を獲得して第一位となった。芭蕉二百回忌、其角二百回忌を終えたこの頃の永機は、押しも押されぬ俳壇の長老となっていた。俳人たちは俳書の刊行に当たりこそぞて永機の序や題字を請い、永機は自筆の序文を与えた。そのような永機にとつて残された仕事は、自選句集を編み自らの集大成を行うこと、そして父老鼠肝の終焉記を遺すことであった。

同年、喜寿を翌年に控えた永機は、自選句集『新五元集』を刊行した。其角の自選句集『五元集』に倣ったことは書名から明らかであるが、内容はかりでなく書物の体裁もすべて『五元集』を手本にしている。本書は大本二冊、白念坊大槻如電序、永機序・版下、同年四月東京晋永機刊。其角が延宝・天和・貞享・元禄・宝永の五つの元号にわたる自句を選んだのに対し、永機の句は嘉永・安政・万延文久・元治慶応・明治のおよそ五十年間にわたる千余章を取める。先に拙稿で述べたが、『新五元集』は永機が自らの出自を語る唯一の資料であり、ほかに父老鼠肝の遺骸を改葬したこと、彰義隊の戦いに関する句、その他永機のさまざまな動向を知る上で大変貴重である。今後の永機研究においてさらに内容を検討する機会を持ちたい。

三十三年には『温古』を上梓する。本書は其角の父東順の終焉を記した「東順居士終焉記」と、永機の父老鼠肝の臨終を記した「鼠肝翁臨終の記」からなる。「鼠肝翁臨終の記」については先に拙稿で言及した。晋派の祖である其角と父老鼠肝の終焉記を編むことは、この年七十八歳を迎えた永機にとって急がれるものであっただろう。これまでも永機はことあるごとに老鼠肝が其角堂六世であることを強調してきた。明治十四年には『み、な草』を編み、「晋子年考」「晋子句解」を老鼠肝の遺稿と銘打った。二十九年には其角二百回忌に合わせて老鼠肝五十回忌を取り越して行った。そして今、其角の父東順とわが父老鼠肝の終焉記を抱き合わせて刊行することは父への最後の孝行であり、老鼠肝、そして永機自らを晋派道統に位置付ける総仕上げであった。

その四年後、明治三十七年一月十日、永機は八十二年の生涯を閉じた。『朝日新聞』は永機の訃報を報じ、辞世を掲載した。

煙消え灰消えて終に何もなし^{注14}
遺骸は其角の眠る芝二本榎の上行寺に葬られた。^{注15}

おわりに

以上、明治時代以降の永機の俳諧活動を残された資料からたどってきた。文久三年に其角堂を称することになってから、永機は晋派道統七世であることをたびたび喧伝し、さまざまな俳諧活動を行うことで俳壇内外で認められてきた。三森幹雄が俳諧教導職として国民教化と俳諧を結びつけたのに対して、同時代に生きた俳人でありながら全く対照的であるといえるだろう。それは本稿冒頭で一言だけ触れたが、幕末に細木香以やその周囲の粹人たちと交わってきたことによるものだと考えている。そのことについては別の機会に考察したい。

注1 拙稿「明治前期俳壇の一樣相―幹雄の動向を中心として

―」（『連歌俳諧研究』第87号、平成6・7）

2 拙稿「其角堂永機の俳諧活動―幕末維新期編―」（『実践

國文學』第73号、平成20・3）

3 勝峯晋風氏「明治俳諧史話」（大誠堂、昭和9）

4 明治二年に萩原乙彦の創刊した『俳諧新聞誌』は、翌三年より『対梅宇日渉』と改題して刊行された。新聞とは名の付くものの発行は季刊で、有名諸俳人の近詠や俳壇

動向を記すなど、内容は総合俳句雑誌のようなものである。

- 5 高木蒼梧氏『俳諧人名辞典』（巖南堂書店、昭和35）、大塚毅氏『明治大正俳句史年表大事典』（世界文庫、昭和46）、『俳文学大辞典』（角川書店、平成7）、谷峯藏氏『芭蕉堂七世 内海良大』（千人社、昭和52）によった。
- 6 田中善信氏『元禄の奇才 宝井其角』（日本の作家52、新典社、平成12）
- 7 石川真弘氏『宝井其角年譜』（蕉門俳人年譜集）前田書店、昭和57）、石川八朗・今泉準一・鈴木勝忠・波平八郎・古相正美編『宝井其角全集 年譜篇』（勉誠社、平成6）など。
- 8 明治八年刊『略解古事記 第八篇』（多田孝泉著、初篇明治七年四月刊）奥付に、「東叡山寒松院住職」とある。
- 9 池野藤兵衛氏『料亭 東京芝・紅葉館 紅葉館を巡る人々』（砂書房、平成6）によった。
- 10 『東京人』215号（都市出版、平成17・6）に六窓庵の記事が載る。
- 11 紫香は蔵書家大久保紫香か。竺仙は橋本素行といい、竺仙染なる染め物を創出した。竺仙については、伊藤一郎・早乙女牧人・堀敬雄氏「橋本素行（竺仙）編『恩』翻刻（一）および解題」（『古典文学注釈と批評』第2号、平成17・12）、伊藤一郎・早乙女牧人・北島瑞穂氏「同（二）」（『同』第3号、平成19・3）、橋本謙一・伊藤一郎・早乙女牧人氏「竺仙曼荼羅―五代目金屋竺仙橋本謙一氏の語る江戸通人の世界―」（『同』第4号、平成21・3）がある。
- 12 明治二十六年の芭蕉二百回忌について取り上げたものは注3のほかに、櫻井武次郎氏『俳諧史の分岐点』（和泉書院、平成16）、青木亮人氏『芭蕉二百回忌と『芭蕉雜談』について』（『大阪俳文学研究会会報』第44号、平成22・10）などがある。
- 13 雲英末雄氏よりご教示いただいた。
- 14 この句はすでに自選句集『新五元集』に掲載されている。
大乗行者無諍骨壺之銘
喜々悲々一条鉄 昨日晴兮今日雨
煙り消え灰きえて終にもものなし
- 15 無諍は永機の法名。『新五元集』の刊行された明治三十一年までに永機は自らの骨壺を用意し、そこに銘を刻むと同時にこの句を詠んでいたようである。
- 16 上行寺は昭和三十八年に神奈川県伊勢原市に移転された。
（えちこ けいこ・実践女子大学非常勤講師）